これは餡(あん)パンではない

三浦俊彦

これは餡パンではない

◎三浦俊

河出書房新社

これは餡(あん)パンではない

★

一九九四年七月二〇日　初版印刷
一九九四年七月三〇日　初版発行

著者★三浦俊彦
装幀★ミルキィ・イソベ
発行者★清水　勝
発行所★株式会社河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二
電話★三四〇四-一二〇一［営業］三四〇四-八六一一［編集］
振替口座★〇〇一〇〇-七-一〇八〇二

印刷★大日本印刷株式会社
製本★小泉製本株式会社

©1994 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

9 これは餡パンではない

言うは易く 22
毒食えば皿まで 30
夏草や兵共が 35
聞いてないよ！ 38
じっと目をつぶって 43
♪むすんでひらいて 43
飛び出すな視線は急に 46

もういいかい、まあだだよ　55
鬼さんこちら　55
ああせいこうせい　55
灯台下暗し　55
美しくてすいません　63
止めてくれるなおっ母さん　63
どうぞ気の済むまで　66
我惟う、故に我のみ在り　70
〈行きはよいよい帰りは　70
我在り、故に彼無し　71
寄るな触るな　72
虎穴に入らずんば　72
良薬口に　82
鏡よ鏡　88
開けーゴマ　88
ちちんぷいぷい……　97

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

これは餡(あん)パンではない。

TOSHIHIKO MIURA

TABLE

CE N'EST PAS UN ANPAN

BLACK HOLE 111

〈君といつまでも 119

大予言 125

はじめまして。 126

127 枯野をただようオブジェ

これは
餡パン
ではない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

雲一つなく晴れた日曜の昼下り、日向健介と白鷹小夜子の足取りは浮き浮きと戸惑っていた。楽しむための人生だ、と生きていければ楽しくなってくる。苦しむための人生だ、と生きていければ苦しくなくなっていく。ふたりの卒業制作指導教官であり洋画科長兼美術史学科長でもある鏑木聡信教授にけさ急に電話で誘われて、東銀座の「前衛工房」なる画廊へふたり連れ立って出かける途中である。そう。学ぶための人生だ、と生きてい

ければいつかハデな一発を飲み込むこともできようし。

最先端にして最良質の概念芸術（コンセプチュアルアート）の展覧会なのだという。日向健介と白鷹小夜子はどんな材料であれデートできるのが嬉しくてたまらない交際成長期段階におりきょうも心躍っていたが、それにしてもふたりとも、コンセプチュアルアートだの実験芸術だのの類いは大の苦手なのだった。ふたりとも古典的な油彩画――日向健介は温感原色を重層的に使った力強い風景画を、白鷹小夜子は砂礫等混入材の肌触りを生かした精緻な肖像画を得意としていた。してその確かな表現力は早くも斯界の注目を集めつつあった。ふたりとも、絵画は形式美に基づく再現芸術だと信じていた。目に見える物を巧（うま）く、美しく描写しなければならない。だからデュシャン以降のネオダダなどその種の流れは、最低限の教養として知ってはいても、胡散臭い詐欺だと正しく敬遠して、美術が文学理論に不当にも屈伏した病理現象だと然るべく軽蔑して、これまで学友たちがその方面に流れるたびに

断乎絶交を重ね王道を見失わずにきたのである。

「だけどさ、『前衛』工房だなんて、えらく大時代な名前だよね。前衛なんて言葉が生きてたの、七〇年代ぐらいまでじゃないかなあ」

「でも油断禁物よ。恥かしい時代錯誤を犯して平然としてられる神経って、案外こわいじゃない。トレンドとスピードのこの時代では本物の反逆精神なのかもしれないでしょ。オブジェが出るか蛇(じゃ)が出るか、警戒してかからなくちゃ」「ふふ。ぎくっとするくらいのタマにお目にかかれりゃラッキーってもんだろ、この毎日退屈な時勢に。……しかしあの鏑木先生がな。いったいどういう気まぐれを起こしたもんだろう」

鏑木聡信。御存知、伝統的手法を堅持した一連の植物画と群像画で知られ数々の権威ある賞に輝く、篤実重厚な画風の大家。いくつもの美術協会の理事や学会の役職を歴任した紛れもない画壇の大御所、その落ち着いた風貌と豊かな銀髪は、まさにふたりが思い描く守るべき古典画法の砦を象

徴していた。穏やかな威厳は神々しく、つねづね頼もしく、しみじみと慕わしく、であればこそその鏑木教授がきょういきなり自分たちを陳腐な名前の実験芸術の巣窟へ誘い出した、その意味が測りかねて、ふたりは面食らっていたのだった。

「前衛工房」は、ひび割れた貸しビルの地下に入口があった。ふたりは階段を降りきったところで両手を広げて驚いた。ビルの外観からして、それになにせ工房というからてっきり狭い汚いアトリエかとばかり思っていたら、なんの広く明るく、自動ドアが二重になっていて、ちょっとした地下街というか、なんだかデパートの中の美術館みたいではないか。

「やァやァヤぁヤぁやァやァやァヤぁ君たち。よく来たね、マきょうは、期待していたまえ、たんまり楽しめると思うよ」

日向健介と白鷹小夜子は、横あいから手を振りながら現われた鏑木を見てびっくりした。こんなにはしゃいで、若々しくて、顔が桃色で、足がわ

くわくと爪先立って嬉々華やいだ教授は見たことがないではないか。あの無口で、重厚が背広を着ているみたいな人が。

「あ、あの……」日向健介が自分でも何を言うつもりなのかわからぬまま口を開きかけたとき、斜め前の湯沸かし室かどこかから、四十恰好の痩せた小柄な男がふわっと三人の傍に吹き寄せられてきた。

「紹介しようね」鏑木がその男を指し示した。「君たちの先輩で、学芸員としてここの画廊の企画をずっとやっている、高久保憲司君。きょう私たちのためにガイドを務めてくれる」

「あ、はじめまして、お世話になります……。榊光寺芸大で鏑木先生のゼミにいる、日向です」

「同じく、白鷹です」

高久保は眼鏡を斜めに光らせて、歯茎を上下全部見せる善良無防備の笑顔で上向きに器用にうなずいた。

「おふたりの作品は春の新人展で拝見しましたよ。いやあ、抜群でした。日向さんの英国海峡風景は、まるで熱帯的な骨太鮮やかな土色物量感が印象的だったし、白鷹さんの熟年夫婦像は、絵具に貝殻や礫を混ぜる硬い点描を地に全面塗料でコーティングしちゃうというあの技法ね、目を瞠らされました。でおふたりとも作品に早くも人格いうか、えもいわれぬ決意いうか一種芸術的信念がびんびん感じられて。あそこまでいくと基礎の鍛練はむろんのこと、もう天性の心技なんでしょうね」

ふたりは一歩ずつ退いて、「あ、そんなことないですが」

「いやいや。少なくとも描写技能では二十年に一人の逸材だ、って鏑木先生いつも言っとられますよ。その逸材が同時に二人も出られた」

ふたりが顔の前で懸命に手を振っていると、謙遜は無用だとばかり鏑木が、「うむ、日向は一昨年パリから帰ってきてすぐ最年少で青韻展に入選したし、白鷹はこないだ蜃気楼展で優秀作と佳作に入って、パンイタリア

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.